

# 流通と S C ・ 私の視点

2010 年 12 月 11 日

視点(1357)

ユビキタス社会と日本の未来の流通・消費!!

ウィキペディアによると、**ユビキタス社会**とは次の通りです。

ユビキタス社会は「いつでも、どこでも、何でも、誰でも」がコンピューターネットワークを初めとしたネットワークに繋がることにより、様々なサービスが提供され、人々の生活をより豊かにする社会である。「いつでも、どこでも」とは、パソコンによってネットワークに繋がるだけでなく、携帯情報端末を初め、屋外や電車・自動車など、あらゆる時間・場所でネットワークに繋がることであり「何でも、誰でも」とは、パソコン同士だけでなく家電などのあらゆる物を含めて、物と物、人と物、人と人が繋がることである。

20 世紀の後半は I T (情報技術) の時代であり、1970 年代までの I B M、1980~1990 年代のマイクロソフト (OS 基本ソフト) とインテル (中央演算処理装置=C P U)、2000~2010 年代のグーグル、アップル、アマゾン…などへと情報自体が「ハード志向からソフト志向へ」「会社からパーソナルへ」「カスタマイズからコモディティへ」「単独からネットワークへ」「送り手から使い手」へと進化しています。この結果「いつでも、どこでも、何でも、誰でも」のユビキタス社会の時代となります。

最初はハードであるコンピューターが価値あるものでした。次はコンテンツや基本ソフトが価値あるものになりました。さらに、情報自体が価値あるものになりました。しかし、情報自体のコモディティ化 (日用品化) が始まりました。グーグルやウィキペディアなどの情報無料化がその例であり、ユビキタス社会においても情報価値は二極化 (情報のコモディティ化と情報のブランド化=ファッションもコモディティ商品とラグジュアリー商品) します。コモディティ化した商品は安価あるいは無料になる一方、ブランド化した情報は、高価格あるいは高価値となります。

このユビキタス社会を技術面で支えるのが、I C T (情報通信技術) で、I T (情報技術) をよりネットワーク化した技術です。

日本の高速通信ネットワーク環境は、世界トップレベルであり、音声、データ通信の処理容量は最大で第 3 世代携帯電話 (3 G) の普及も高水準であるのに、I C T の利用活用は先進国で最も遅れています。

クラウドコンピューティングの概念と応用サービスは、今、各国ですさまじい勢いで広がっており、米国では 21 世紀の新産業になろうとしています。この産業が成立するには「**ブロードネットワークの普及**」と「**C P U (中央演算処理装置) の高性能化**」と「**仮想化の技術**」が必要であり、日本ではこの 3 要素の基盤が国内では一応備わっています。

しかし、この産業は世界で戦う為の技術や人材が不十分で、韓国と比較してもその差は歴然としています (日経新聞の「大機小機」を参考にさせていただきました)。

私は 21 世紀型消費及びそれに対応する 21 世紀型流通業態は「**20 世紀のアンチテーゼと 19 世紀以前のノスタルジー**」と「**21 世紀型の新産業と新技術**」と「**近未来のライフスタイルの変化**」の 3 つと考えています (六車流：流通理論)。

S C は 20 世紀の新産業である「大量生産→大量販売→大量消費のモダン消費の基軸となった産業革命」と「車社会」が融合して、20 世紀が生んだ最強の業態となりました。さらに、S C を含む流通は、20 世紀の後半に発展した I T 技術とその応用による前期情報社会とも一体化して進歩しました。

21 世紀の基軸となる産業は「**ユビキタステクノロジー**」(I C T をネットワーク化し、相互利用できる技術=後期情報社会)と「**バイオテクノロジー**」と思われます。広義のバイオテクノロジーは自然環境を含む生物全体のメカニズムの応用とその改善は 21 世紀の基本技術です。

21 世紀の流通及び消費は、このユビキタステクノロジーとバイオテクノロジーによって大きな影響を受けます。それは、20 世紀の S C が大量生産技術と車社会と I T により完成されたのと同じです。

(株)ダイナミックマーケティング社<sup>+</sup>  
代 表 六 車 秀 之